第二次大戦後のヘミングウェイ文学

清　水　　裕

序：　この小論で第二次大戦後のヘミングウェイの文学思想の経過を中心におき，それとの関係で最後の彼の死そのものも含めて考えて見たいと思う。

第一次大戦参加以後，戦争と切り離し難くなった彼の作品は，1940年の *For Whom the Bell Tolls* のあと戦後の50年になって *Across the River and Into the Trees* という形で現れたが，この後者は *For Whom the Bell Tolls* を含めて従前のものとは相当な違いがあるようである。彼が戦争について描いた作品はこの *Across the River and Into the Trees* を以て最後としているから，戦争作家という一つの側面から眺めた彼の思想は戦後どういうところに落ちついたかを検討する必要がある。又，52年には *The Old Man and the Sea* が発表されているが，彼の作品を流れる否定的人生観（この内容は簡単ではないが一応ネガティヴなもの，即ち「否定的」としておく）はどうなっているか。この作品も彼の人生観を表明するものとしては（その後の多少の随筆を除き）最後のものである。これは変化とか差違の有無にかかわらずまとまった彼の作品における最終的表明として確かめておく必要がある。第三に殆んど死の直前に書かれた回想的随筆集 *A Moveable Feast* においても又，何らかの変化がありはしないかを検討する必要がある。

以上の三点を中心にヘミングウェイのゆくえを調べるのであるから個人的な意味では1950年とか *Across the River and Into the Trees* 以後のヘ

ミングウェイと限定できないわけではないが，*A Farewell to Arms* にしても *For Whom the Bell Tolls* にしても，当時の戦争そのものは勿論それをもたらした政治情勢がきびしく反映しているし，又，その後その作品の書かれた時点において，そのような作品を可能ならしめた社会的政治的条件を考慮に入れないわけにはいかない。故に *Across the River and Into the Trees* 以下を辿るについてもその立場から「第二次大戦後」という表現をとった。

次に第二次大戦後の彼の行動も一応整理しておく必要がある。特に晩年は健康に恵まれず，このことは作品の内容にも影響を及ぼしたろう。最後に自殺[1]をした時点で，彼は文芸家としてどこまでゆきついていたか，少くとも作品に表れたものから見てどういう状態でピリオドが打たれたかを見ておかねばならない。ここでは簡単を期して表示する。

＜第二次大戦後のヘミングウェイの行動の概略＞

1945（46才）…第二次大戦終る
　　帰国，ハヴァナに住む
49……イタリアに滞在
50……*Across the River and Into the Trees*　出版
52……*The Old Man and the Sea*　出版
53……スペイン，アフリカ旅行
54……帰途，連続２回の飛行機事故に会う
　　ノーベル賞受賞
58……アフリカ旅行
59……スペイン旅行
　　健康衰えノイローゼの兆候あり
60……*The Dangerous Summer*（随筆）を書く

1　直後の発表では「銃の手入中暴発による事故死」となっているが，事情（極度の憂鬱症でその頃何回も自殺を試み目の離せない状態が続いていた）を知る者は一様に自殺と判断している。ヘミングウェイの弟レスターも「自殺」と言明した。

ハヴァナを引きあげケチャムに移住

A Moveable Feast 出版。ミネソタのメイオー病院に入院（11月）

61（62才）…退院（1月）　再入院（4月）

この頃病勢大いに悪化。退院（7月1日）してケチャムの自宅に帰る。翌2日早朝自殺。

註：60，61年はやや詳しく記した。

本論：　既にのべたように三つの作品が中心になるが，ここでは作品論そのものではないからヘミングウェイの戦前からの思想系列（戦争観，人生観）に絞って問題を検討する。

Across the River and Into the Trees について

題材は陸軍大佐キャントウェルなる年配の主人公が若い愛人に語る形での戦争経験である。ここで戦争はどのように語られているであろうか。

大佐にとって戦争はいやな苦しいものではあるが，既に50才となり，高血圧にもなっている彼としては単に一つの過去の追憶にすぎないようで，多くの庶民やこの社会の現在や将来にかかわりのあるものではないようだ。狩猟にいく途中彼が見る昔の戦場は今は道路も整美され埃も立たない。タリアメント河をドライブしていくと両岸は緑の草が生え釣りをしている人の姿も見える……といった情景の中で，橋の近くに爆撃で破壊された建物もみえるが，それはなまなましい戦禍の跡といった感じは出ていない。むしろ第三者的な見物人でもあるかのように運転手に「こういうところには余り country-house は建てない方がよい」と批評し，続いて "'……if you've got a church, eight hundred yards away from any bridge.'" (chap III) ともいっている。爆撃を受けた人々の痛みはこの大佐にはなくて，むしろ被害者の不注意のためだったということになるのであろうか。

これで思い起すのは，スペイン戦争の頃ヘミングウェイが書いた *Old Man at the Bridge* という短篇の一情景である。ここでは戦禍に追われ孤独な行くあてもない老人と一偵察兵とがたまたま，とある橋のたもとで交す会話が主なものになっているが，老人は自分の生き甲斐でもあり全財産でもあった山羊や猫や鳩をあとに残しておいたことを悔み，又，無事でいるだろうかと心残りでならないのである。偵察兵の方では老人自身が逃げおくれはしないかと心配して“‘Get up and try to walk now.’”と励まして見るが，力つきた老人はふらふらと埃の中に尻もちをついてしまう。ここで作者は最後に，今日は曇天で敵機が来ないことと，猫が自分で何とか生きのびていくだろうと思えることがこの老人の持ちうるしあわせのすべてであったと結んでいる。

一つの橋の情景を同じ戦争と結びつけて描くにしても滑らかな道路を高級将校が19才の少女を妻代りに侍らせていく車窓から眺めるドライブ風景と，今は歩く力とてもない打ちひしがれた76才の老人とでは，余りにも大きなへだたりがあるといわねばならない。1950年のキャントウェル大佐の時点で橋のたもとの老人はヘミングウェイの視界から消えていきセッティングは大きく変り鴨猟へのドライブ（又は少女との恋のドライブ）となり，戦争は遠い過去に埋没してしまったのである。それは一種の郷愁をさえ感ずる程のものであり，たまたま目にうつる破壊の跡もタリアメントの流れや青い岸辺を点綴する一つの風景なのである，といえば，この老大佐に対して余りにも苛酷なことになるだろうか。全くのところ，今の大佐の関心は家を潰された人々のゆくえではなくて800ヤードの安全距離といった物理的空間的関心におきかえられてしまったことは確かである。そして戦争への無関心はなお続くのである。即ち6章では大佐が渡し舟にのって出かけるが，その船頭の兄弟が6人のうち5人まで戦死したという会話になると，じめじめした話はやめようということになって，内容は一転して伯爵夫人

のお屋敷だとかゴードンやバイロンが借りていた家の見物をすることになってまう。ここでも戦死者への関心よりは美しいお屋敷についての興味へと，バイロンなどの名前までかりた文化的装いの中ですりかえられていくのである。

一方では部分的ではあるが，戦争批判とか，レヂスタンスらしき傾向も（正しく読みとれるかどうかは別として）出ていないわけではない。例えば7章では戦争によって利得する者をにくむための秘密結社を作る話などがそれである。しかし37章に出てくるその結社の綱領（又は方針書）“the Supreme Secret” らしきものは “Love is love and fun is fun. But it is always so quiet when the gold fish die.” というナンセンスに近いものであり，「gold fish が死ぬ時は非常に静かだ」というのは何かの意味があるのかどうか，読者には読みとれないのである。元の7章には，兵隊を免れるためにわざと負傷したり性病（“infection”）にかかったりする兵士達の話も出てくるが，ふざけた結社の話と一連のものとなっているため単に好奇心をそそるトピックにしかならないのである。ぎりぎりに追いつめられた下級兵士達が秘かに案出する自己防衛の苦肉の策はそれ自体が残酷な戦争への深い問題点を出していると思われるのであるが，この点についても作者は深く追求するところがないようである。もともとこの結社は大佐がいっているように “a purely fictitious organization” で会員は僅か5人と称し “noble, military and religious” なものとのことであるが何のためにこのような空想的なものを挿入したのか明確でない。先にのべたように一応戦争批判としてここに引きあいに出したのではあるが，そういう意図で作者が挿入したとしてもその目的は全く達していないのである。又，「戦争に死んだお前の友人を思い出せ」（4章）とか「（軍人は）肩に星がつく程真実をつかむことがむづかしくなる」（12章）といった言葉も出てくるが，密着性のない口説になりやすいのであって，*A Farewell to*

Arms に描かれた生き生きした戦場の描写，的確で強烈な情景などには遙かに及ばないのである。

以上のように何か戦争批判らしきものを意図した点があるかと思うと，一方では戦争を是認したような一面もうかがえるのである。"'If you ever fight, then you must win it. That's all that counts'." (chap. 41) つまり「勝たなきゃならぬ，勝つことがすべて」というのは，多分始まるまでは反対だが始まったら事情止むをえぬこととしてこれを是認して，あとは勝利だけを追求しよう，という発想なのであろうが，これは *A Farewell to Arms*, *For Whom the Bell Tolls* における作者の態度とはかなりの距離がある。*A Farewell to Arms* の主人公は一旦始まった戦争の，しかも激しい混乱のさなかで自分の生命を守り彼女との愛を結ばせようとして戦争を放棄し離脱していった。この場合勝利の追求は彼には何の興味もないのである。*For Whom the Bell Tolls* におけるジョーダンは正義の戦いを最初から是認しファシズム打倒の旗を掲げ勝敗を度外視してこの旗の下に死んでいったのである。彼にとっては「勝つことがすべて」でなく正義と民主々義がすべてであった。800 ヤードの距離をおくというのが爆撃を是認した上での発想であると同様に，勝つことがすべてというのは無理やりにでも戦争を始めようとする人々にとっては都合のよい進軍ラッパにならないとも限らぬのである。

The Old Man and the Sea について

この作品は従来のヘミングウェイらしい思想的立場，感じ方，描き方がよく表れたものの一つだといわれている。

ではヘミングウェイらしい思想とか，人生観とは一体どんなものだろうか。ヘミングウェイにとって人生で最も確かなものはこの生きている現実，手にふれ，この目で現に今みている事物そのものに他ならないのである。第一次大戦に加わって間もなく迫撃砲弾によって瀕死の重傷を負ったことは

彼にとって大きすぎるほどのショックであり，終生ぬぐい難い精神上の烙印となった。彼が助かり隣の兵士が死んだとて単なる偶然以外には何らの意味とか理論的根拠があったわけではない。だから今日助かった自分も明日は死ぬかもしれない。明日が確かでないヘミングウェイにとって将来の希望を語ることは何の意味もなく，信じうるのは現在ここにこうして自分が生きているという現実だけとなる。抽象的な思索よりは具体的な一つ一つの行動の積み重ねを通してのみ自己を確認できるのである。これがヘミングウェイの出発点であり内容の中心でもある。この点から考えると彼としてはどうしても体系的な思想とか分析よりは，より直接的な実感とか，行動そのものは勿論その行動の時間的結果として確認できる経験といったものに頼ることになるのである。そしてそのことは思想的展開を欠いた一定の枠を設定する傾向にもなるのであって，この地点に立って自己を位置づける場合，その自己はみづからをとり囲む周囲の条件を基本的にかえようとはせず，むしろ現実の実態を止むを得ないものとして受容しようとする姿勢となるのである。このような限界の中で自己の行動を手段とし個人的経験を唯一の導きとして舟を進める場合老漁夫もやはり悲劇の人とならざるを得ないのである。彼は原始的な小舟や釣道具を使い，しかもたった一人で遠海にのりだして大魚と闘い，又，さめを撃退しようとするのであるが，彼はその用具とか方法の遅れが実は悲劇的な失敗を招いているのだということについては気がつかず，逆にその与えられた悪条件を挽回しようとして超人的な技術と能力を振い幾多の苦しみにもたえぬくのである。作者はこの老人によって，一個の人間が数十年の生活経験の中からつかんだ最高の技術と逆境にたえうるぎりぎりの限界とを試そうとしたのである。“I will show him what a man can do and what a man endures.” (P. 89) と老人は呟やく。又，“A man can be destroyed but not defeated.” (P. 103) とものべているが，これは結局人間は亡びうるものだ

という悲劇的結末を覚悟の上で，しかもなお，敗北しないと主張するのは「耐えしのぶ」(endure) ことを意味しているのであろう。この立場は "The world breaks every one and afterward many are strong at the broken places." (*A Farewell to Arms*, chap. 34) との考へ方と非常に近い基盤に立っていると考えられる。故に *The Old Man and the Sea* は *A Farewell to Arms* とか *Big Two-Hearted River* などの孤独な否定的人生観の流れを汲み，その延長上に位置していることになるのである。

次に運命について考えておく必要がある。一定の限界の中でわが事が成就しない時に，人はよく運命について考えやすいものである。ヘミングウェイも又，この老人をして "'I am not lucky. I am not lucky any more.'" (P. 125) と慰めに来た少年に対して告白させているのである。これが老人の「耐えしのんだ」ことの結論である。再びこの少年と漁に出る話もするが，成功の可能性は確保できない以上，報われぬ「耐えしのび」に終るかもしれない。ヘミングウェイは「耐えしのぶ」ことを強調し，そのことでさも人生に意味ありげに装うこともあるのだが，実はその内容は保証のない不確定不安定なものでしかないのである。その内容的にも理論的にも弱い一種の忍耐論が現実のきびしさに脆くも打砕かれた時，「その砕かれたところで強くなる[2]」と言い張るわけにはいかず，結局は運命という安易な逃げ場を求めざるを得なかったのである。 *A Farewell to Arms* では先の引用に続いて "But those that will not break it (=world) kills." となっており，善良であろうが穏かであろうが勇敢であろうがこの世はそれらを区別なく ("impartially") 殺してしまうのだ，とのべているが，*The Old Man and the Sea* ではそのような徹底的なものでなく一種のフェイタリズムに寄りかかっているのである。あとでヘミングウェイの運命論が在来のものと異る点にもふれるが，大まかにいって運命論そ

2 既出 *A Farewell to Arms*, Chap. 34 の引用英文参照。

のものは新鮮味のないコンベンショナルなものであり，同時に人間の弱さと暗さの表明であり，闘いをやめた場合の臆病な口実なのである。だから老漁夫もさめの大群に折角の大魚を食い荒らされた時「いっそのこと釣れなきゃよかったのだ」"I wish……I had never hooked the fish." (P. 103)と弱音を吐くのである。

さて，始めにこのさめが襲った時 "……he was full of resolution but he had little hope. It was too good to last, he thought." (P. 101) と描かれている。老人は運命の中で自己の力をためす「決意に満ちた」らしい。しかしその決意も前の「忍耐」と同じく案外内容はあやふやなもので「よいこと，つまり幸運は長続きしないもの」と考えているのである。だから「希望は殆んどなかった」のである。ヘミングウェイは人間の幸福やしあわせは何処からか偶然与えられるものであり，人間が自分の力でこの生きている世の中に作りだせるものだとは考えていない。幸福と見えてもそれが与えられたものであって見れば，いつ運命によって奪い去られるかもしれず従って持続性の保証は全くないことになる。偶然を必然に転化するとか，ましてしあわせそれ自体を人間の力を集めて積極的創造的に獲得していくといった拡大した文学的な舞台はヘミングウェイの発想にはなくて，ただ与えられた運命に従容として従うか (*The Killers*) 或いはその環境の中で隠遁者のように小さな自分の生活を順応させて孤独をたのしむか (*Big Two-Hearted River*) 又はその枠の中で，人間の自然発生的な生きぬく闘いとして無方針にもがく姿を描くか，大体この三つのタイプが多く，老人は第三番目に属するといえるだろう。しかしこの場合でも，ヘミングウェイが単なる古典的運命論者[3]と異なる点は，そのもがきの中に「耐え忍ぶ」力と耐えしのぶことに支えられて行動する一つ一つの具体的な積み重

3　ここでは格別の意味ではなく，単に昔からある古めかしい運命観を持つ人という意味である。

ねの中に人生の意味を汲みとろうとしてきびしく追求を続けた，という二点にある。その積み重ねの中からどれほど体系的な人生論を引き出したかは既述のように疑問ではあるが，とにかくその経過の中で，それがすべての運命論者の持つ否定的悲観的な色調を帯びながら一切のセンチメントをドライに切り捨てたところに現代的な新しい側面を見ることができる。

A Moveable Feast について

これはヘミングウェイが第一次大戦後数年間をパリで過した若い頃の思い出，即ち彼の文学への精進生活，交際した文人，パリの風物，カフェ，レストランなどを題材とした随筆集である。1957年（58才の時）から書き始め1960年（61才）に書き終えたもので，すべてで丁度20点の随筆から成っている。30余年も以前のことではあるが，彼の人生の極く末期における視点でどのように過去を回想したかということは，その晩年の心境を知る上で可成り重要な資料ともなるのである。

その内容から一つの新しい傾向と思われるのは，従来の彼の人生に対する否定面の中に肯定的な一面があらわれて来たことである。*With Pascin at the Dome* で彼は次のように書き始めている。“It was a lovely evening and I had worked hard all day and left the flat over the sawmill and walked out through the courtyard……” 既述のようにヘミングウェイは人間を悲劇的否定的な基盤に立って考えたので自然を描く場合でもそれは暗く，降り続く雨，ぬかるみ，立ちこめる霧やもやなどが多く，明るい朝とか，美しい夕ぐれ（ここでは lovely evening）などは殆んど描かれなかったのである。この美しい夕ぐれはきっと彼自身にも快く感ぜられたに違いない。“I had worked hard all day.” という言葉の中には文学に精進する彼が一日の仕事を終えたあと（had worked だからずっとやっていたに違いない）なじみのレストランに夕食に行く姿が美しい夕景にとけ込んだ形で描かれている。自然を暗く，又は疎外した目で見たのとは

大きな相違が感ぜられ，働く人々の汗の臭いに連がる活動的な姿が自然と合一しているように見える。*Big Two-Hearted River* におけるニックの魚釣りの姿もある意味で自然にとけ込んでいるといえるだろう。しかしこの場合のニックは社会から逃避した形で静寂と孤独の Two-Hearted River の中へ隠れ家を見つけたのであり，そこには何らの生きた人間社会との積極的交渉やかかわり合いはなかったのである。しかしこの短かい随筆の中では一市民として平凡だが，それなりに血の通う生きた人間，そしてその人間が「腹をすかせて」("hungry")「美しい夕方」の町を歩いていく情景を，固定した静寂の中でなく動的な人の世の中で捉えることができる。"I had worked hard" の語句も，かの老漁夫が大海のただ中で絶望的な奮闘をする hard work とも質的に違って，乏しいがその生活を肯定し自分の文学修業に希望と自信のある労働となっているのである。"I went on up the street looking in the windows and happy with the spring evening and the people coming past." (ditto) ここでは「春の夕ぐれ」なる自然は勿論往き来する見知らぬ人々にも心たのしむものがあるようだ。本来ヘミングウェイは主観的情緒に基づく喜怒哀楽とか心理過程の説明などは文章に表わすことを極力さけたのであるが，ここで 'happy' といった感じを直接書いているのは珍らしいことである。楽しげにレストランなどの店をのぞき込んだりしている状況が，以前の hard-boiled style ではなく一種の情緒的なうるおいをもって読みとれるものである。感覚的ではあるが周囲への適合，人生へのなにがしかの愛着とか，よい意味での enjoyment が語られているようである。

そのような中で数年間すみついたパリの思い出はやはり楽しいものであったらしい。最後のエッセイ *There Is Never Any End to Paris* の終りの二行で "…this is how Paris was in the early days when we were very poor and very happy." と結んでいるのである。そして「非常に貧しか

ったが又，非常に楽しかった」という内容として，飢えも自己鍛練の一つで今から思うと有意義なものだったという一層進んだ解釈へまで到着しているのである。 "Hunger is good discipline and you learn from it." (*Hunger Was Good Discipline*) ここまでくると単に感覚とか情緒の問題でなく一応理性的な立場からのモラルの域に進んだと考えてよいだろう。

しかしこのような反面に従来と変らないような暗い描写もある。"Then there was the bad weather. It would come in one day when the fall was over. ……the cold wind would strip the leaves from the trees in the place Contrescarpe. The leaves lay sodden in the rain ……." (*A Good Café on the Place St-Michel*) この描写は既にのべた *With Pascin at the Dome* と対蹠的なものである。又，*People of the Seine* には秋の物悲しい自然が，"Part of you died each year when the leaves fell from the trees and their branches……" といった風に仲間の誰かの死と共に描かれているのもある。

以上，人間や自然への積極的な一面もあるが，又他方では以前のムードのままに留まるものもあり，それらが交錯していることが感ぜられる。このような状況の中で人生への追求がどの程度までなされているだろうか。

ヘミングウェイは，死についての最初の自覚を *Indian Camp* の中で描き追いつめられた袋小路の死と生への虚無感を *The Killers* で，又，死に際しての内省を *The Snow of Kilimanjaro* で，又，この世に生きがいを感じ使命を果した者の死の意味を *For Whom the Bell Tolls* のジョーダンの最後の言葉の中に表わした。*A Moveable Feast* ではフィッジェラルドの死のことも書いているが（フィッジェラルドについては *Scott Fitzgerald*; *Hawks Do Not Share*; *A Matter of Measurements* の三つがある）パリで会った彼との会話，印象，美しい彼の妻ゼルダのことなどが主で，友人の死を遙かに回想し，そこから自己の人生について更に深く学ん

だという点はよみとれない。

その他数人の文人達との交友会見記も特に印象的な内容とはいえない。ただ *Miss Stein Instructs* からは二三の意味を汲みとることができる。ここにはヘミングウェイについてよくいわれる "one true sentence" を求めての彼の修業の有様が書かれている。"……there was always one true sentence that I knew or had seen or had heard someone say." といっているのは，かねてから彼の制作上の基本立場をのべたものである。そしてこの修業の意義を前述の "hunger" と同じく "good and severe discipline" とのべたのち，しかし文学上の仕事には discipline と共に運も必要との見解をここでもくり返している。"—and that needed luck as well as discipline—" 極く一般的にいう流行作家（いわゆる「大家」も含めてよい）なら別であるが，真の意味での価値ある作家や作品にとって「運」が必要なのかどうか。確かに時運に恵まれないということはあり得ても長い人間の歴史は真に価値あるものであれば必ず暗闇の中からでもいつかは探り出して光をあてているものだ。ヘミングウェイと親交のあったA・E・ホッチナーによれば，*Across the River and Into the Trees* が非常に不評であったことが憂鬱症の一つの原因とのことであるが（*Papa Hemingway* による）もしそうだとしたら彼の文学観の弱さが不幸な死の遠因の一つだといえないだろうか。

結論：　まとめると次のようなことがいえるであろう。

1.　第二次大戦後のヘミングウェイは社会的政治的感覚及び戦争観といったような面では後退し，特に *For Whom the Bell Tolls* などと比較すると戦後のものは可成りの退潮を示している。彼は国際的にも，又彼自身も最も高揚を示したこのスペイン戦争の時期においてさえ，急進左派と思われないために細心の注意を払って書いているほどであるから，戦後アメリカの国際情勢が彼に微妙に反映しなかったとは考えられない。とにかくそ

の後退のために，大きな社会的位置づけの中で時代の不安，悩み，問題点などを映し出すようなダイナミックな力作を産み出すことが困難となった。

2.　一面において人生への肯定面も現れ，いわゆる彼の実存主義的なものの中に横たわっている否定的要素と新たな肯定的要素とが共存し始めた。但しこれは否定を克服揚棄した立場での肯定ではなく，同次元での平列的なものである。つまり否定そのものが内容的に究明されつくした後で出てきたものではなく単に混淆している状態である。

この肯定面が新たな文学作品を産み出すまでに精神的組織化されず，むしろ功なり名とげた自己を中心とする安定した環境の中に癒着していったのであり，それ故に対社会的な意味では真に未来の展望を語るという意味の肯定よりはむしろコンベンショナルな妥協となっている。

3.　矛盾した未整理なムードの中で以前のような人間の生死，否定面への真摯な追求力が衰え，従って，文学的想像力も弱まったようである。*The Dangerous Summer*（'60年）なる小エッセイでは死にたじろかぬ闘牛士の姿が描かれてはいるが新たな展開という程のものではない。

4.　彼の死はこの時訪れた。既述のホッチナーの報告の如く *Across the River and Into the Trees* の不評も多分原因の一つであろうし，又，54年の飛行機事故により健康が衰えたことも大きく挙げられるだろう。火傷の上に頭部と脊椎の打撃は烈しく，治療のため自分のノーベル受賞式にストックホルムへも行けないほどであった。又，彼がメイヨー病院に入院中 *For Whom the Bell Tolls* に出演して以来の親友ゲーリー・クーパーが病死したことも彼をひどく落胆させたといわれている。部分的に生じた肯定的ムードも彼の人生観の深みから変質させるものではなく，ますますつのる憂鬱症と被害妄想に対しては殆んど救いにならなかったようだ。

このような肉体的，外的な悪条件の重なる中で，彼は未整理でしかも交錯したムードのままで，人間の死そのものを文学的に追求する気力が衰え

た時自分で解決し切っていない死の中へみずからを追いやったのであった。

S. F. Sanderson はジョーダンとキャントウェル大佐の死を次のように比較している。

"Jordan had nearly reached the Colonel's position of unassailable strength; yet as the pain of his shattered leg mounted while he waited for the Fascist cavalry to come within range of his sub-machine-gun, he had to struggle against the temptation to shoot himself as his father had done. Jordan is saved from his strain of cowardice by the advent of Lieutenant Berrendo's patrol, and dies a hero's death through a lucky chance of timing. The Colonel, however, faces the inevitability of death throughout the whole action of the novel; and he has no thought of making concession of any kind to his last enemy. He faces death unflinchingly, continuing to live as he had always lived, fearless and in full command of himself and of the situation.[4]"

ヘミングウェイは度々くり返したように，彼みづからが描いたジョーダンのような政治目標はなく従ってその目標に結びつけて死の意味を考え時機のくるまで耐えることもできず，大佐のように個人的な悟りから死に対して譲歩せずおそれず堂々と生き続ける境地にも到達し得なかった。ただ "inevitability of death" に直面していたという客観的事実だけが三者に共通であった。

Texts:

Across the River and Into the Trees, Jonathan Cape, London, 1961.
The Old Man and the Sea, Jonathan Cape, London, 1955.
A Moveable Feast, Penguin Books, 1966.

---

4 ERNEST HEMINGWAY: Grove Press, Inc., New York. 1961, p. 109.